湖南省岳陽市における「慰安婦」生存者の聞き取り調査報告

李青凌

はじめに

2021年5月19日から24日にかけて、上海師範大学の中国「慰安婦」問題研究センター（以下「センター」と略称）が湖南省岳陽市において地元の「慰安婦」生存者3人から聞き取り調査を行った。筆者はこの調査チームに参加する幸運に恵まれた。ささやかながらこの小文によりこの調査について報告したい。

岳陽市（図二の右上濃い色の部分）は湖南省の北東に位置する市であり、湖南省（図一）は中国内陸の中央よりやや東南にあり、北は湖北省、西は重慶市（四川省）に接し、長江中下流に位置し、洞庭湖が南に広がる。

図一　湖南省の位置

図二　湖南省の地図

日中戦争下の1938年10月、日本軍は湖北省の省都である武漢を占領した。日本軍が重慶・四川方面に侵攻すべく湖南省の攻撃を開始したため、それまで戦争の後方であった湖南省は一転して前哨戦の陣地となった。同年11月8日から日本軍は湖南省の臨湘、岳陽、湘陰、平江、華容などに侵入し、湖南省の各地の町や集落がほぼ陥落した。1945年8月の日本軍の降伏に至るまでの7年間、岳陽はずっと日本軍の駐屯地であった。[1]

2021年5月までの湖南省における日本軍「慰安婦」被害調査の状況をふりかえってみよう。第一段階は、2001年6月、上海師範大学教授の蘇智良が湖南省益陽を訪ね、当時の「慰安婦」生存者劉秀英と譚玉華から聞き取りをしたことである。それをきっかけとして湖南省「慰安婦」被害者の訪問・聞き取り調査が始まった。第二段階は、2016年から2019年

[1] 『岳陽市志』。

まで集中的に調査が実施された段階である。この段階で地元の調査ボランティアの協力を得て、「慰安婦」生存者16名の聞き取り調査が行われている。

その後、新型コロナウイルスの感染拡大によって一時的に調査が停頓を余儀なくされたが、コロナ禍が落ち着きを見せるようになった2020年10月には再び調査が活発になった。それから現在までを第三段階と言うことができる。2020年10月からセンターの調査チームが湖南省岳陽市、臨湘県、平江県を訪問し、「慰安婦」被害者たちの聞き取りを行った。そして2021年5月に筆者を含む調査チームが湖南省華容県、平江県に行き、聞き取りを行うことになったのである。現時点では、湖南省において発見された「慰安婦」被害者は合計21名にのぼる。

その21名の被害者の内、湯根珍は、「自分のことを裏切り者が日本軍に報告したため日本軍が村に侵入し、家族の命と村を焼き払うと脅して自分を強制連行しようとした」と証言した。彭仁寿は、村に侵入した日本軍から隠れようとして棚に潜り込んでいた時に、日本軍治安維持会[2]の加入者が家族と村民を殺すと脅し、彭を拉致した。易菊連も、侵入した日本軍を避けようとして逃げる途中に捕まった。又、平江県の林は、14歳の頃に日本軍に拉致された。父は娘が拉致されたと聞き、助けに行って日本軍に殺されてしまった。ほかの2名の女性は、川の傍で洗濯しているところを日本軍に見つかって拉致された。

湖南省各地の檔案館に所蔵される地方誌（『華容県誌』、『平江県志』、『岳陽市志』など）によると、山が多く解放区、抗日遊撃区並びに中間地帯と被占領区[3]が並列して存在していた当時の湖南省には前線と後方の境界線がはっきりしていなかったと記載されている。日本軍「慰安婦」にされた中国人女性は、民家の娘が自宅や道で目をつけられて拉致被害を受けたケースが典型的だ[4]と従来から指摘されている。そして、もう一つ見過ごせない事実は、被害女性の証言から、小さなグループを組み合わせた僅か数名の日本軍人に捕まり、その後、集団的で組織的な暴力を受けたことが明らかになったことだ。

聞き取り調査の準備と態勢

センターは、ただ単に新たに名乗り出た被害者の聞き取りを行うだけでなく、その調査が「慰安婦」被害者たちの名誉回復と支援に役立つことを目的として聴き取り調査を行っている。性暴力被害女性への聞き取りは、言うまでもなく容易なことではない。そこで調査チームは、「慰安婦」被害者が遠慮しないで話ができるように工夫し、準備を重ねた。

準備の第一は、聞き手と語り手の間に共通の認識を築くことである。聞き取り調査の対象選定は、聞き手側が語り手を一方的に選ぶと思われがちだが、実はそうではない。確かに聞き手側は、語り手である「慰安婦」被害者の認知症の有無や自らの言葉で話ができるか否かなどを考慮する。同時に、語り手側も聞き手側がどこの誰で何を調査しているのかを予め伝えられ、考えた上で許諾を決める。つまり、聞き手と語り手が互いに聞き取り調査に関する共通の認識を持っていることを基礎に実現されるのである。

第二は、関連する文書資料の収集である。過去のことを語る語り手は記憶がぼんやりし

---

[2] 治安維持会は日中戦争期間中、日本軍が占領した中国現地によりよい統治を実現しようとするために設立した一時的な地元の傀儡組織である。よく「維持会」と言われた。

[3] 日本軍にとっては「敵性地域」、「準治安地域」と「治安地域」。

[4] 蘇智良：『日本軍「慰安婦」研究』、団結出版社、2015年。

たり混乱したりする可能性がある。そのため、ただ口述を聞くというだけではなく、これを補う文書資料が不可欠である、口述資料は、文書資料との対照を通して、内容の真実性と細部のディテールまでを検証することができる。従って、語り手が確定してから聞き取りを実施するまでの時間に、語り手がいる地域の資料をできるだけ多く収集するのが緊要である。2021 年 5 月の調査では、語り手に会う前に聞き手のチームは次のような資料（表 2）を入手した。

表 2　文書資料一覧

番号	名称	所蔵地	備考
1	『華容県誌』	華容県檔案館	「大事記」部分（1923~1949 年） 第十九編「軍事」部分（P621~623）
2	『荊州地区志』	荊州市檔案館	第五章「戦事」部分（P665~667）
3	『石首県誌』	石首檔案館	「大事記」部分（1943~1945 年）
4	『華容県図』	湖南省民政庁	『湖南省分県地図』1941 年版
5	『汨羅市志』	汨羅市檔案館	「大事記」部分（1935~1949 年） 第五編「軍事」部分（P213~220）
6	『平江県志』	岳陽市史志室	巻一「総述」部分（P1~3） 巻二「大事記」部分（1935~1949 年） 巻五「政治」部分（P437）
7	『岳陽市志』	岳陽市史志室	第一冊「総述巻」、「大事記巻」と「建置・区画巻」の部分

チームは先ず、1939~1945 年の湖南省とそれぞれの調査現地の公文書に記載された日本軍侵入に関する史実情報を把握する作業を行い、語り手が話す内容を史実と照らし合わせて確かめることができるようにした。またチームは、聞き取りの質問項目（表）を作成した。インタビューでは語り手の記憶を喚起しやすい質問から始める方がよい。聴き取りの要点と注意事項（婉曲な表現、慣用表現、言葉の言い換え…）を注意することが重要である。

以上のような事前準備に加えて、語り手が皆高齢者であり方言で語るという事情から、傍に標準語が話せる通訳に同伴してもらう準備も必要である。通訳は地元の方言が話せれば誰でもできるわけではない。長年の調査経験を踏まえてチームは「慰安婦」被害者が話す時、自分自身の肉親が傍にいれば勇気を得て徐々に語るようになることに気づいていた。そこで 2021 年 5 月の調査においても、聞き取り調査の実施現場に調査チーム側は語り手の娘や息子、息子の妻などに依頼し、方言と標準語の通訳者の役割を担っていただいた。

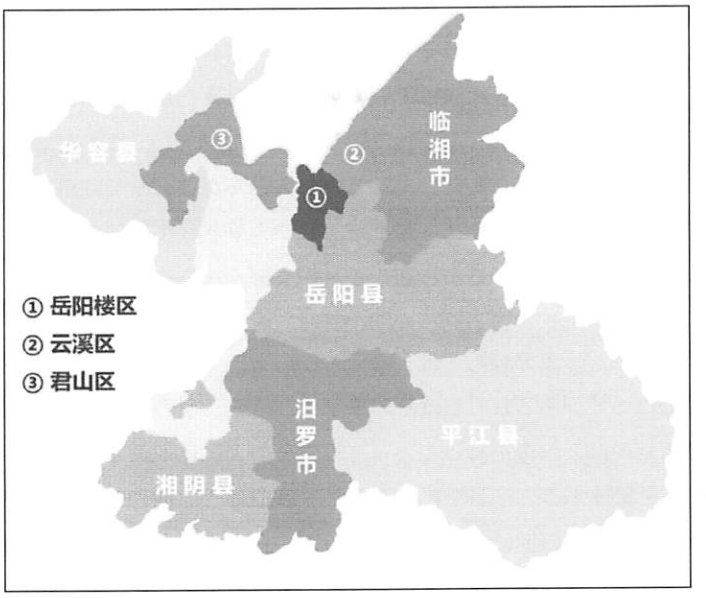
センターからの参加者は筆者を含め男女 5 人だが、聞き手の人数は 3 人で行うのがよいとのセンターの考えに基づいて、女性 3 人が聞き手を務めた。3 人の内、中国「慰安婦」問題研究センター研究員である陳麗菲が主な聞き手となり、筆者と上海師範大学の修士生張さんは助手をつとめ、質問と資料面で支え、話の取り次ぎ手、録音、メモ取りを行った。筆者は主に話の中にあらわれた疑問点を見つけ、訂正・追加・補足すべき部分を提起する役目を担った。男性 2 人は撮影を担当し、1 人がビデオ、もう 1 人が写真を担当した。つ

まり彼らは聞き取り現場と「慰安婦」被害者であるおばあちゃんの証言を記録し保存することが任務であり、その責任も重大である。

聞き取りの内容

（1）小瑞おばあさん

2021 年 5 月 20 日、私たちは地元ボランティアの協力を得て、小瑞おばあちゃん（以下「小瑞」と略称）の家を訪ねた。小瑞は岳陽市内ではなく辺鄙で遠い田舎で暮らしている。下の地図（図三）の①が岳陽市内であり、一番左上の色の薄い所に小瑞の家がある。車で 2 時間ぐらい走って、午後 1 時 20 分頃にようやく小瑞の家についた。この日に聞き取り調査を行うことは予め伝えており、到着して聞き手一行がどこのだれであるかが確認された後、早速、聞き取りを開始した。



図三　岳陽市の地図

先ず聞き手の主役（陳）が挨拶し、日常生活のことから話を始めた。小瑞は陳との会話のパターンに慣れるにつれて、徐々に過去のことを語るようになっていった。会話は、過去のことに関する回顧を手がかりとして少しずつ戦争の話に近づいた。その時に聞き手は決して焦って「慰安婦」の話に突入しないように自戒し、小瑞の様子を見守りつつ対話を続けた。その理由は、かつてセンター調査チームが日本軍侵入や日本兵などの言葉を聞くだけで怖くて体が震えだす被害女性のケースを経験したことがあったからである。陳は、聞き手のエキスパートと言える豊かな経験の持ち主であり、なるべく直接的に性に関する言葉を使わないようにして語り手の話に耳を傾けていた。小瑞の息子の妻がずっと傍に寄り添い、方言と標準語の通訳もつとめた。こうして聞き取りは順調に進んだ。以下が、小瑞の語った内容である。（問答形式で聞いたものを文章化した）

その日、私が自宅にいると、村に突如日本軍が侵入して来た。刀と銃を持っている日本軍が村を歩きまわって地元の女の子を捜していた。私は怖くて逃げたが追いかけられて捕まった。手は紐で縛られこそしなかったが、日本軍人 2 人（時に 4 人）が私の前と後ろを固めて私を歩

かせ、どこかへ連れていった。約30分前後歩いて塀で囲まれた大きな庭のような場所に着いた。日本軍は瓦葺きの建物に住んでいたが、同じく捕まって連れて来られた女の子たちは茅葺きの粗末な建物に住まわされていた。みんなの部屋は、その茅葺きの建物の中に作られたちっちゃい部屋。ベッドがあったかどうかはもう記憶がぼんやりしているが、なにか床に布団を敷いて寝たようだ。着替える物はない。かける布団もない。強制連行の時の服を着たままで寝るしかない。服は日本軍人がひっぱって破った。それでも、着替えるための衣服一着さえももらえなかった。かけ布団もなかった。一日に一食、時々二食。誰がご飯を作っているのかはわからないが維持会の人ではなく日本軍がご飯を持ってくる。その時にはまだ維持会は作られていなかった。怖くて泣きっぱなしで、お腹が空くことさえ気を配る余裕がなかった。日本軍が部屋のドアに立って見張っていた。庭に高い望楼がある。その望楼に立っている日本軍がいる。部屋の外に日本軍が行列して順番に入る。まだ若い小娘であった私の部屋に、日本軍が一日に少ない時でも2人は来た。午前、午後、夜、来たい時にいつでも時間に関係なく来る。日本軍が部屋に入ってくる度に私は怖くて体が震えていた。それでも日本軍はよく刀をあげて振りながら私を脅迫した。毎回来る日本軍人の顔は違い、数日後にはまた別グループの日本軍人が来た。そのまま半月ぐらい過ぎた。果てしなく長く感じた。半月以上だったかもしれない。そのような日々から救い出したのはお父さんだ。ある日、お父さんがひとりで駐屯地に来て私を家に連れ帰った。帰り道でお父さんは泣いた。帰宅後、私の大好きな小船がなくなっていた。美しくて質が素晴らしい船だった。お父さんに聞くと「何も聞くな」って。そして「日本軍人に捕まったことを誰にも言うなよ」と慎重に言い聞かせた。家も空家みたいになっていた。貯めていた金の延棒も消えていた。家の暮らしは、捕まる前の裕福で幸せな生活から貧しい暮らしへ変わった。数年後になって、ある日、私はその経緯を知った。あの日お父さんがひとりで駐屯地に来ることができたのは、お金を持っていって維持会の人に日本軍との交渉を乞い、それでようやく娘（小瑞）を釈放することができたそうだ。18歳になる前に、私はお父さんの意思に従って結婚した。しかし、その前にあんな目に遭ったから、ずっと子どもは孕まなかった。夫は優しくしてくれて仲良かったが、私は夫にすまない気持ちを持っていて離婚した。その後、現在の夫と結婚して養子を迎えた。

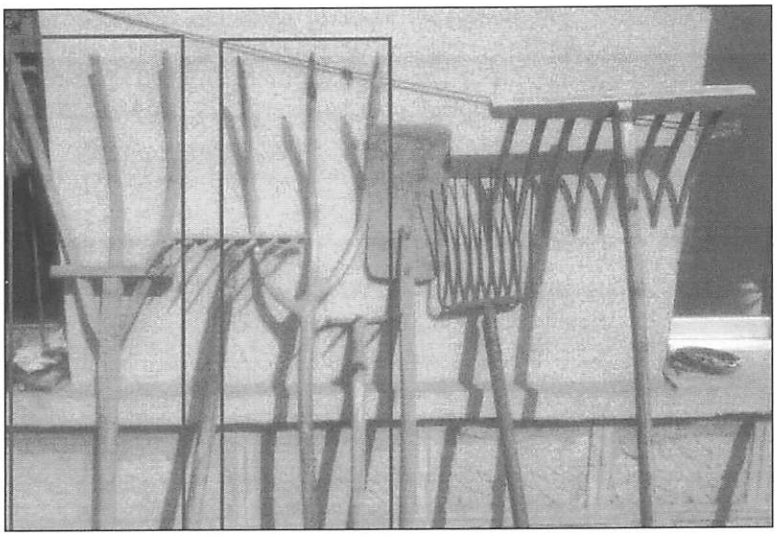
（2）大瑞おばあさん

名前から大瑞おばあさん（以下「大瑞」と略称）と小瑞の関係がすぐわかった。大瑞は小瑞の姉だ。調査チームは、小瑞に聞き取りを行う時に大瑞のことも聞いた。その時に小瑞は妹の立場から大瑞が捕まった時の様子を語った。

5月21日午前に大瑞の家を訪ねると、大瑞は大きな椅子に座って膝の上に暖かそうな毛布をかけて服を縫っていた。大瑞の家族と挨拶した後、小瑞の時と同様に日常生活の話から聞き取りが始まった。が、話が日本軍に及ぶと大瑞は急に体が震えだし、大声で「死ぬほど怖い！」と叫んだ。聞き手の主役（陳）はすぐ大瑞を抱いて大瑞が落ち着くまでずっと優しく慰めていた。大瑞の様子を見た陳はためらわず聞き取り調査の中止を決めた。もし無理に聞き取りを続ければ、記憶に蝕まれた大瑞は過度なプレッシャーのため二次被害を受けるおそれがある。それは決して調査チームの本意ではない。それで大瑞への聞き取りはここまでで終わったが、地元のボランティアから、大瑞を知るもう一人の当事者である張二英（以下、「張」と略称）の存在を教えられた。地元のボランティアの協力を得て、

調査チームは老人ホームに住む張を訪ねて行った。

張によると、大瑞は若い時に張の母と仲が良く、義理の姉妹関係を結んでいた。それで張にとって大瑞は親子の義を結んだ母という存在である。張は幼かったある日、日本軍人に捕まり、日本軍人に昔の湖南省の農家によく見られる農具（図四）を脇の下に入れて



図四　張がもてあそばれた農具（線に囲まれたもの）

高くあげられた経験がある。まるで人形やボールなどのように扱われ、もてあそばれた。張は怖くて卒倒した。自宅のベッドで目覚めると、実母が傍におり、実母は「お前の命を救ったのは義理の母の大瑞だよ。大きくなっても絶対忘れないでね」と張に言った。張は自分が救われた経緯を聞いた。あの日、張が日本軍にもてあそばれているのを偶然に通りかかった大瑞が見た。大瑞は、その子供が自分の義理の娘だと気づき、勇気を出して「その子の代わりに私が貴方たちと一緒に行きます」と言うと、日本軍は喜んで張を解放した。こうして張は救われたが、大瑞は日本軍に連れて行かれ「慰安婦」にされた。

（3）蒋おばあさん

5 月 22 日、岳陽は雨が降っていた。調査チーム一行は泥だらけの山道に沿い、車で約 2 時間をかけて、平江（前出の図三の右下）に住む蒋おばあさん（以下「蒋」と略称）の家に行った。地元ボランティアの協力を得て、予め聞き取り調査を行うことを蒋の家族に知らせた。筆者一行がどこの誰であるかが確認された後、聞き取り調査を行った。

蒋は若い時に女兵を志願して戦地の医療兵になった経歴がある。聞き取り中、日本軍に言及すると、他の対象者に比べて積極的に話すようになった。蒋は自分が女兵を志願して戦地の医療兵になった経歴を大いに語りつつ、日本軍に捕まったことはやはり最初は不安だったのか語ろうとしなかった。それで調査チームは聞き取りの過程で蒋の気持ちを慎重に見守り、大丈夫だと判断してから日本軍に捕まったことを聞いてみた。蒋は娘からの支持と調査チームからの励ましの言葉で勇気を出し、その体験を語った。以下は聞き取りからまとめた証言の一部分である。

わが家には子どもが姉と私の女の子 2 人しかいなかった。幼い頃に父は亡くなった。母は私を「童养媳」（幼時から息子の将来の妻として他家に引き取られて育てられる女児）にして、

ある同い歳の男児の家に送った。姉は体が弱くてよく病気になる母のそばにいた。7 歳頃に、その男児は死亡した。叔父（母の弟）が私を迎えにきて、私が実家に帰った時には母はすでに病気で亡くなっていた。女の子だからといって私は叔父に軽視されたり差別されたりしたことはない。当時の中国では、一般的に男の子しか教育を受ける機会が与えられなかったが、叔父は自分の娘として私を扱い育ててくれ、私と姉を私塾に通わせて女子校にも行かせてくれた。おかげで、私は字が読めるようになった。1939 年、日本軍が侵入してくると聞いて私と姉は女兵を志願して軍隊に入ることを望んだ。姉と一緒に汨羅に行き、入隊を申し込んだ。その後、医療兵の一員として野戦病院で負傷した兵士を世話する仕事をしていた。野戦病院は戦場により移動するから、他の戦場に移る命令を受けた。野戦病院が移された翌日に私は町に買い物に行く予定があった。町を歩いている途中、国民革命軍と日本軍の戦いが始まった。私は日本軍に追いかけられて捕まった。連行された私は木造建物の二階に監禁され、一階に刀や銃を持った日本軍人が立って見張っていた。私は「しょせん死ぬほど日本軍に虐待されているのだから、一か八か二階の窓から下に飛び降りてみよう」と思って飛び降りた。足の骨が折れたが、その時はそれに気を配る余裕はなく、必死に走って逃げた。あれから足が不自由になって、今でも足を引きずって歩いている。

検証作業

「慰安婦」被害者たちの語りを聞き取った調査チームは、その後、証言に出てきた場所に行って確認したり地元の人に聞いたりして被害者たちの話の検証を試みた。

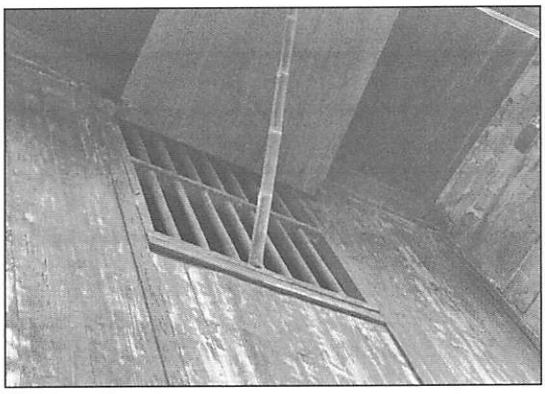
被害者である女性たちは高齢であるため、半世紀前の出来事の具体的な日付と場所をはっきり覚えていなかったというのはごく普通のことであった。研究者である調査チームには、その語りの内容を学術的に検証する責務がある。公文書に残された史料とフィールドワークを引証して歯車がかみあうように互いを証明しあうようにすることが重要である。

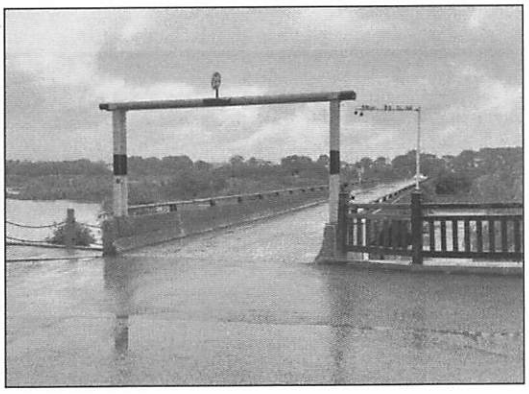
昔の中国では今日用いている暦法があまり使われず、民間人はよく伝統的な暦法（陰暦）を使っていた。中国の伝統的な暦法と現在の世界の共通暦（太陽暦）との間には日付のズレがあり、田舎では日付より天候・節気（気候の変わり目を示す 24 の日。例えば春分の日、秋分の日など）の変化に一層敏感だった。従って、私たちは小瑞が捕まった日付を知るため、証言に出た当時の天気の寒暖、『華容県誌』にみえる日本軍侵入の日時、地元の維持会が設立された日時という 3 つの情報を合わせて小瑞が捕まった日付と「慰安婦」にされた日数を明らかにしようとした。

具体的に言えば、小瑞の証言に「捕まったのは維持会が設立される前のことだった」、「ちょっと寒くてコートを着ていたが、重い服を着るほど寒くなってはいない季節だった」という言葉から、1943 年の初春か初秋であると推定した。これに加えて、日本軍の侵入が 3 月 8 日に開始しており、維持会は 5 月中旬頃に設立されているという事実をふまえて、彼女が捕まったのは 3 月 10 日から 5 月中旬までの間だと推定した。また、小瑞の証言に出て来た「庭」と「トーチカ」（捕まって監禁された慰安所の位置）に関する検証は、現地を探訪し、また地元の古老から証言を集めて検証した。つまり、小瑞は「埠頭まで連れられていった」「約 30 分前後の間、歩いていた」「壁に囲まれた建物：トーチカがあり、大きな庭があった」と語っていることから、彼女が言及した現地を調査し、そこに長年住んでいるお年寄り 3 人に聞き、範囲を絞って建物を明らかにした。これは資料に記載されて

いる日本軍の駐屯地と符合しており、この建物が慰安所であったと確認することができたのである。

また蒋の場合、証言に出た「監禁された二階建の木造建物」、「地面に飛び下りた二階の窓」と「必死に走って逃げた時に渡った川」などの場所の現地（図四）も探訪した。





図四　左の写真は二階建の木造建物、右の写真は走って逃げた時に渡った川（筆者撮る）

終わりに

このフィールドワークで多くの経験をし、勉強ができた。それらは私の人生に大切な思い出として残っている。この小文の終わりに、このフィールドワークで最も感動したシーンについて書いておきたい。それは、私たち一行が小瑞ばあちゃんの家を離れる時に、ばあちゃんが「ようやく青空（青天）を見たわ！」と言ったことだ。中国では、「青空（青天）」と言う言葉が出るシーンは、いつも裁判の公正無私と繋がる。その時によく言われる人物は「包拯（包青天）」である。包拯は歴史上に実在した人物で、名裁判官として活躍した物語が現在まで伝えられ、中国では子どもからお年寄りまで誰でも知っている。徳川光圀を「黄門様」と日本人が呼ぶように、中国人は尊敬をこめて彼を「包青天」と呼ぶ。だから小瑞ばあちゃんが言いたいのは「今日まで私が受けた不公平な扱いを理解してくれ、私の訴えを執り裁いてくれる人がようやく出た。私は今までずっとこの日を待っていた！」ということである。

いかに真実が深く埋められ隠されても、世界に真実を告げたいという女性たちの気持ちを抹殺することはできない。